

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	オーストリア国立工芸美術館蔵『さゝれいし』
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2005
Jtitle	三田國文 No.41 (2005. 6) ,p.42- 48
JaLC DOI	10.14991/002.20050600-0042
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20050600-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オーストリア国立工芸美術館蔵『さゝれいし』

辻 英子

成稿にあたっては、オーストリア国立工芸美術館 (MAK Österreichisches Museum für Angewandte Kunst / Gegenwartskunst, 旧帝室美術工業博物館 Museum für Kunst und Industrie) 蔵『さゝれいし』(一軸)の閲覧の機会を得、翻刻掲載許可をいただくにあたって、同美術館東洋美術部長ヨハネス・ウィーニンガー (Johannes Wüninger) 氏およびモーザー・ブリギッテ (Brigitte Moser) 氏に大変お世話になった。また、国立国会図書館の『鶴亀松竹物語』(二軸)および東洋大学図書館には『鶴亀草子』(一軸)の熟覧の機会を得た。ここに記して厚くお礼を申しあげる。

本絵巻の成立年代は、江戸時代前期 無款。写絵巻 一軸 所蔵番号 MAL.349 R.Lieben 旧蔵。入館年度 一九二二年。縦三三・三種×全長六五六・三種。褐色地に濃紺・金糸で牡丹唐草文を配し、織り出した金欄地。見返し薄茶・萌黄色の布目に金繡で花模様を織り出した地。左肩に、白茶色に金泥で霞引きの紙題簽(縦一六・三×横三・五種)を押し、「さゝれいし」と墨書。内題なし。見返し・軸付紙ともに金泥霞を引き、小豆色

の平打紐を付す。本文料紙は金泥草花文の下絵の入る上質の鳥の子。書体は流麗巧妙で、絵も綿密・豪華、金切箔・金砂子を蒔く。絵は全五図。第一図が九三・八、第二図 四八・五、第三図 四八・五、第四図 四八・四、第五図 四七・〇。錯簡はない。

オーストリア国立工芸美術館蔵 『さゝれいし』詞書

人皇の御はしめしんむ天わうより
十三代にあたらせ給ふみかとはをせい
むてんわうとそ申たてまつりけるこの御
代はとりわきめてたく君はけんせい御名
をあらはしまし／＼ければ民をあはれみ
五日の風十日の雨こくとゆたかにうる
ほしけるさるほとにこのみかたとに男み
こ廿一人姫宮十七人いしやう三十八人
めはひめ宮にておはしましけるかすもかき
らさるほとこのわうし達の御すゑなれば

その名をさゝれ石の宮とそ名付け参らせ
給ふ御かたち世にたくひなくすくれ萬の
けいのうの道にもかしこくまし／＼ければ
あまた渡らせ給ふみこたちにこして御てう
あいなめならすいつきかしつき奉給

ける(第1紙)

(絵一) (第2紙)

さるほとに御としのかさなるにしたかひ
てひかりさしそふやにそみえさせ給ける
かくて御とし十四の春のころせつしやう
とのゝきたのまんところにうつし参ら
せ給ふめてたき御おほえあめかしたの
うちにはうへこす人もなかりけるしかるに
さゝれいしの宮おほしめしけるやうはそれ
人けんにしやうをうけてうむしやう
のことはりをのかれす是うき世のならひ
なりくはきうのつゝうへになに事を
かあらそひせき火のひかりのうち
いかなる事をたのしまんよひにはらう
月をもてあそふといへともあかつきは
雨たゝる空にかくれぬ三かいとくそん
はしやうかくのしやくそんたにもしやうし
のをきてをはのかれ給はすいつるいきの
いるいきをまたぬ世の中にえいくはに
まよひいたつらに後の世の事はしらす

していのちをはらんときたゝすこ／＼と
ひとりくらきみちにおもむくおりふしあ
またのけんそくありともひとりしてつ
きしたかふへからすあはうらせつつか
手にわたりてかしくせられんそ
のときこうくわいするともいかてかか
なふへきたゝのちの世をねかほんには
しかしとおほしたち給ふこそまことに
ありかたき御こゝろさし也(第3紙)

(絵二) (第4紙)

それしやうとは十方にありと大きくな
れはいつかたもおとりまざりは侍らし
なれともわきてめてたきしやうとは
東方しやうるりせかいなるへしとおほ
しめしてつね／＼おこたらすなむや
くしるりくはう如来しやうるりせかい
のけうしゆほんくはんあやまたすむかへ
とらせ給へときねんし給ひける有ゆふ
暮ることなるに月のいつるかたをうち
なかめさせ給ひ我のちの世にむまれん
しやうとはそなたそとおほしめし御こゝろほ
そくすこ／＼とたゝすみて立給ひける
ところにごくうよりとひきたるものを
御らんすれはこかねのてんくはんをいた
たきたる官人一人あまくたりてさゝれ

いしの宮のもとにまいりるりのつほを
ひとつたてまつりて申されけるはわれ
はこれとう方しやうるりせかいのやくし
によらいの御つかひにこんひら大しやうと
申もの也此つほにらうやくありこれ
すなはちふらうふしの業也聞しめさ
れさふらは、御としもより給はずわすらは
しき御心ちもなく何までもかはらぬ御す
かたにて御いのちもなかくいさ、かも御
心にかゝる事もなくよろこはしきことのみに
てさかへ給ふへしとて官人は雲の上
にあかり給ふとみえしかかきけすや
うにうせにける(第5紙)

(絵三) (第6紙)

さてもさゝれいしの宮このつほを手
にとり給ひてあらありかたの御ことか
なこのとし月ねかひたてまつる御利しや
うかなと三度いたゝきつほをあけて
らうやくをなめ給ふにあまきあち
はひいふはかりなしそのあちてんのかん
ろもかくやらんとそおほしけるさて
又あをきつほにしろきもしすはれ
りよみて御らんすれば哥なり

さゝれいしいはほとならん代とまでも
身のうきことはあらしとをしれ

とありこれすなはちやくしによらいの
御詠哥なりこの仏道によりてさゝ

れいしの御名をあらためさせ給ひてい
はほの宮とそつかせ給ひけるかくてとし
月を、くり給ふほとにいさ、かもものゝかなし
き事もなく御こゝろにかゝるおもひもなし
御すかたはときはにてしたいにいみしく
なりてえいくはにほこりましゝける(第7紙)
御いのちのななき事をかそふるにあた
はず大かたみかとの御代をしるすに
せいむてんわう ちうあい天わう
しんくうくはうこう おう神てんわう
んんとく天わう りちうてんわう
はんせい天わう いんけう天わう
あんかう天わう ゆうりやく天わう
せいねい天わう
すへて十一代の間いつもかはらぬ御す
かたにてさかへさせ給ふ(第8紙)

(絵四) (第9紙)

しかるに秋のなかはのことなるに月さやか
にすみわたりたるおりふしふつせんに
むかひともし火かうくとかゝけそへて
しんこんたらにをねんしおはしましける
ところにかたしけなくもやくし如來は
たつとき御すかたをけんしいはほの宮

にむかひての給ふやうなんちいつまて
かかゝるしよくせにこゝろをとゝむらん十
せんのくらゐとても人けんのたのしみは
かきりありおもへはわつかのほとなりい
そきわかすむしやうとへまいる給へとす
すめさせまかてけるいはほの宮それとも
まことにありかたき御事かないかなるとこ
ろにかととはせ給へはそれしつこやるりせかい
のありさまはかたるともつきすよしまつ
ちきやうはすなはちるりなり八しゆのしや
うこん七ほうのほうしゆれきくたり
御身をうつさんしやうとは七ほうのれんけ
のうへに玉のほうてんをみかきたてしろ(第10紙)
かねのかはらをならへこかねの戸ひらをひら
かせ玉のすたれをかけかうへのきちやう
にてやうらく玉のはたをしやうちてかし
やうの風になひかせれうらきんしうに
て身をかざりたりとうなんとうによいね
うかつかうして日夜てうほにおこたらす
百みのおんしきをそなへてちんすいちん
しやのかほりとこしなへにして何ことを
もこゝろにふそくのなきところなりいかで
かゝる八くのせかいに住給はんとの給へは
いはほの宮きこしめしへんしもはやくく
してたへとの給へはほとけのはうへんに

て此しやうをかへすしてすくにしやうる
りせかいにいたり給ふこそありかたけれ
すなはちこれやくし如来の

あたへさせ給ひたる

ふらうふしのく

すりのゑとく

なり(第11紙)

〔繪五〕(第12紙)

かゝる有かたきことは上代にも末代にも
ためしすくなき事共也もろくの仏の
ひくはんはたのみたてまつれたのまれ
給はんとの御ちかひなりかほとにこそお
はせずとも神ほとけをしんし給はん人な
とかそのしるしのなかるへきなむやくし
るりくはう如来とつねにねんし給ふへ
き事ともなり(第13紙)

一 さ、れいし

『さ、れいし』は、室町時代後期に成立したと推定され、御伽
草子二十三編にも収められていて、御伽草子の代表的作品の一
つとして知られている。不老長寿を祝う祝儀物の一種で、相似
た作品は少なくないが、薬師信仰を中心にすえているところに
特色がある。

成務天皇の末の姫宮のさされいしの宮は、薬師如来を深く信

仰していたところ、ある夕暮れ、金毘羅大将が天降って、瑠璃の壺に入った不老不死の薬を授かった。この薬のお陰で、宮は十一代にわたり長寿を保ち、最後は東方淨瑠璃世界に往生した。

ここに紹介する一巻は、松本隆信『室町時代物語類現存本簡明目録』（慶応義塾大学斯道文庫論集）第一輯所収 昭和三十七年。その後、増補改定を加えたものが、『御伽草子の世界』に所収三省堂 一九九二年。本稿は後者による。《》は翻印や複製・影印の掲載された書名を、※印は、所在を確認しただけで、未だ本文の調査の済んでいない伝本で、頭部に※印を付して諸本の最後に記載してある。

さざれ石別名鶴亀物語

(一) (イ) (江戸前期) 刊丹緑絵入横本 (日本民芸館)

御伽文庫本

《室物五》

(ロ) スペンサー・奈良絵本 小一帖

(二) (イ) 穂久迹・絵巻 大一軸 《大成六》

(ロ) 国会・絵巻 (『鶴亀松竹物語』二軸の内の上巻)

《室物五》

東洋大・絵巻 (題簽「鶴亀草子」) 大一軸

某氏・絵巻 (題簽「鶴かめ松たけ」) 大二軸の内の上巻)

※小野幸・奈良絵本 横一冊

先きに述べたように、オーストリア国立工芸美術館蔵本は、『簡明目録』分類「(一)イ」、すなわち横山重編輯『室町時代物語集』第五に翻刻されている丹緑絵入横本に近い。詞章は、かなり詳しくなっているが、同系の話とみてよいだろう。「ロ」スペンサー・コレクション本は見えていないので、近似度について、工芸美術館本は(イ)ロのどちらに近いのか、その比較はいまのところできない。

穂久迹文庫所蔵 (外題・内題なし) 絵巻は『室町時代物語大成』第六に、国会図書館所蔵『鶴亀松竹物語』絵巻は、『室町時代物語集』第五に翻刻されており、絵は省かれている。ともに同内容で、宮はこの世にながらえ、薬師の法を弘め衆生を利益せよとの教えに従う、という点が「(一)」とは異なり、別系統である。

二 オーストリア国立工芸美術館本と

丹緑絵入横本 (御伽文庫本)

この場合、細部にわたる語彙の異同比較は必要ないと考えられるので、注目されるいくつかをとりあげると、次のようになる。丹緑本は横山重《室物五》により、国会図書館本・穂久迹文庫本 (以下、国本・穂本と略称する) とを合わせてカツコ内に記す。

イ 十三代にあたらせ給ふみかとはせいむてんわうとそ (丹本、「十二」だい。せいむ天わうと)。国本・穂本は「十三代」。成務天皇は第十三代の天皇。(第一紙第2行)

ロ くはさぎょうのつこうへになに事をかあらしひ (略) ありかた

き御こゝろさし也(3・10〜27)。丹本・国本・穂本、これに該当する文ナシ。以下該当文のない場合は特記しない。ただし、異なる場合は、「同じ」と記す。

ハ いさゝかも御心にかゝる事もなく(略)上にあかり給ふとみゑしか(5・24〜27)

二 あまき(国本・穂本、同じ。丹本、「あまた」あちはひいふはかりなし(丹本、同じ。国本、「〜事かんのことく」、穂本、「〜こと、ひとへに、かんろと申とも」(7・5〜6) 丹本、「あまき」の誤か。

ホ さゝれいしいはほとならん代とまでも身のうきことはあらしとをしれ(丹本・国本・穂本、「君が代は、ちよにやちよに。さゝれいしの、いはほとなりて、こけのむすまで」(7・10〜11)

『古今集』賀、初句「わが君は」とある。『和漢朗詠集』にもとられ、中世には第一句が「君が代は」となった。

へ 御いのちのなかき事をかそふるにあたはず大かたみかとの御代をしるすにすへて十一代の間いともかはらぬ御すかたにてさかへさせ給ふ(丹本、「御命長くわたらせ給ふことは。すべて八百よさい也」)(8・1〜10)

ト しんくうくほうこう(丹本、「しんこう天皇」)(8・4)

チ しかるに秋のなかはのことなるに月さやかにすみわたりたるおりふしふつせんにむかひ火かうくとかくけそへてしんごんたらにをねんしおはしましけるところに(丹本、「さゝれいしのみや。あるよもすから、ともし日をかゝげ、やくししんごんを、ねんじおはしけるに」)(10・1〜5)

リ いそきわかすむしやうとへまいり給へ(略)いかなるところにかととはせ給へは(10・10〜14)

ヌ しろかねのかはらを(略)へんしもはやくくしてたへとへは(10・19〜11・12)

ル なむやくしるりくほう如来とつねにねんし給ふへき事ともなり(丹本、「〜おんころく、せんだりまとうき、そはかく」)(13・7・8)

以上見てきたように、オーストリア国立工芸美術館本は丹緑本に比べ、叙述が詳細で文意を解しやすく、なめらかな文になっている。そして、オーストリア国立工芸美術館本と丹緑本との間には、「ホ」の歌の内容に小異があるものの、国会図書館本および穂久速文庫本の後半部にみられるような筋上の相違はない。よって、同系統本と扱っておく。

三 付、国立国会図書館蔵『鶴亀松竹物語』について

写絵巻、上下二軸。所蔵番号YD—古2408(ル—174)。上巻縦三一・八×全長八〇五・三糎。絵は全五図。下巻縦三二・〇×全長一〇九八・九糎。本文料紙は、金泥で秋草等の下絵をおいた上質の鳥の子紙。表紙は、緑地に金糸・銀糸や色糸で、三角模様の花模様を取り混ぜて織り出した金欄地。見返し・軸付紙は布目を押した金紙。鶯色の平打紐を付す。巻軸は牙軸。奥書はない。朝倉重賢筆に極めて似ているが、同筆とは断定できない。

画図については、横山 重氏が『室町時代物語集 第五』の解題(二八八 鶴亀松竹物語 帝國図書館蔵)井上書房 昭和三十七年 四八三頁)で述べているように、

奥書、上・下各巻の巻末の下方に、次のように記してある。

勅絵所預

從四位下土佐主藤原光貞筆 (朱印)

同 嫡 藤原光孚筆 (朱方印)

土佐光貞(二七三—一八〇)六、土佐絵所の末流、宝曆四年(一七五四)正月絵所預となる。光芳の二男、正五位下に叙せられ、内匠大属、内匠大允、左近衛将監、土佐守等に叙任。宝曆十年(一七六〇)宮中の御障子を画き、また明和元年(一七六四)同八年、天明七年(一七八七)等大嘗会悠紀主基の屏風を画く。次いで寛政元年(一七八九)内裏造営の際、諸殿の障子を画く。文化三年(一八〇六)二月四日没す。年六十九。洛東智恩寺に葬る。(沢田章『日本画字典』人名編 昭和四十五年(初版昭和二年) 思文閣)。

土佐派絵師、その本姓は藤原で、右の奥書の筆は最終段にあたる第18紙末に記し、兩人同筆とみられ、いづれかが代筆し、印だけを変えた可能性が高い。とすれば、詞章と画図とは同時代の作と考えると、本絵巻は、江戸時代中期末頃の成立と考えられる。

なお、薬師如来は東方淨瑠璃世界の主尊で、まだ菩薩であったとき十二の大願をたてて衆生救済をした。現世利益の仏とし

て注目され、ことに江戸時代には(朝観音・夕薬師)といわれるほど信仰された。薬師信仰の日本文学への投影は阿弥陀の信仰との密接な関連のもとに平安中期より顕著になり、その功德を賛嘆した歌謡は『梁塵秘抄』に収められている。また、中世の本地物語の中に「熊野の本地」「阿弥陀の本地」以下、阿弥陀と薬師の因位の関係を夫婦と説くものが多いのも注目される。太陽の運行からの連想も手伝って、東方の薬師は衆生を西方の阿弥陀の浄土へ導くと考えられたためである(岩波仏教辞典)。このようにみえてくると、『さゝれいし』絵巻は月に寄せる『竹取物語』の世界や、薬師祈願にはじまり阿弥陀来迎で結ばれる『更級日記』の世界についても改めて問い直す興味深い問題を提起しているといえよう。

オーストリア国立工芸美術館蔵
『さゝれいし』(1軸)
(所蔵番号MAL349)

縦 33.3纏

紙数	横(纏)		詞(行)
第1紙	49.3		16
第2紙	93.8	絵I	27
第3紙	49.0		
第4紙	48.5	絵II	28
第5紙	74.8		
第6紙	48.5	絵III	19
第7紙	48.0		10
第8紙	26.4		
第9紙	48.4	絵IV	19
第10紙	47.8		19
第11紙	49.0		
第12紙	47.0	絵V	8
第13紙	25.8		
合計	656.3		146

見返し 26.5 軸付紙 10.5